

中国語の授業に取り組むアクティブ・ラーニングの試み

An Attempt of Active Learning Method in the Class of Chinese

藺 梅*

Lin Mei

本稿は、本学のグローバルスタディプログラムの中国語の授業に取り込んだアクティブ・ラーニングの試みについて検討したものである。本稿では従来の講義型のクラスと比較しながら、語学の授業におけるアクティビティの能動的な学習の取り入れの問題点と可能性を探った。最後に、アクティブ・ラーニング形式の授業では、学習成果を確保するために授業の設計の重要性と反転授業の導入も必要があることを明らかにした。

キーワード：アクティブ・ラーニング 講義型 能動性 学習成果 反転授業

はじめに

国内外の教育の現場では、アクティブ・ラーニングの導入は盛んになりつつある。各教育分野にわたる様々な科目においてグループワークの学習形式が実践され、それに関し教育効果の向上の事例も多数報告されている。

大学のみならず、ほとんどの教育現場では従来、教育者は一方的に学習者へ知識の伝達をするのが主流となっていた。しかしながら、近年教員と学生が意思疎通を図りつつ、学生が主体的に問題を発見し、その解決法を見出していく能動的な学修、いわゆる「アクティブ・ラーニング」という授業の形式が各科目で実践されていることが報告されている。

本稿では、本学のグローバルスタディプログラム（以下 GSP: Global Study Program）の中国語の授業に、グループ学習のやり方を取り入れた結果を従来の講義型のクラスと比較し、その結果の分析を踏まえて、現行のやり方の問題点及び今後の課題を探ってみたい。

I. アクティブ・ラーニングの定義及び導入背景

1. アクティブ・ラーニングの定義についての理解

アクティブ・ラーニングの定義として、文部科学省学習指導要領には「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含

*流通科学大学人間社会学部、〒651-2188 神戸市西区学園西町 3-1

めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。」¹⁾と示されている。

一方、溝上（2007）は、アクティブ・ラーニングとは「能動的な学習」のことで、授業者が一方的に学生に知識伝達をするスタイルではなく、課題研究やプロジェクト・ベースド・ラーニング、ディスカッション、プレゼンテーションなど、学生の能動的な学習を取り込んだ授業を総称する用語であると述べている²⁾。

筆者は上述のような内容に基づき、以下のような理解とする。即ち、アクティブ・ラーニングとは、教員が一方的に受講者に知識伝達をする講義ではなく、学習者が主体として学習内容や問題の解決方法などを考え取り組むことである。したがって教員として、「受講者が授業を通して何ができるようになったのか」を基準にして授業を準備し、対応しなければならない。

2. 中国語授業にアクティブ・ラーニングの導入背景

筆者のももとの動機は受講者の学修意欲を高めることである。森澤（2015）は、「第2回大学生の学習・生活実態調査報告書によると、“学生の自主性に任せる”より“大学の教員が指導・支援するほうがよい”と考える学生が2008年度の15.3%から2012年度は30.0%に、「あまり興味がなくても、単位を楽にとれる授業がよい」が半数を超えている。」という調査データを挙げた上に、「これまで授業の主流であった講義形式の授業、すなわち、教員が一方的に意識を伝達し学生が聞くだけという受動的な教授法では対応が困難になってきたと言わざるを得ません。」³⁾と指摘した。

実際には本学の多くの学生が積極的に受講するというより、むしろ単位を容易に取得できるかどうか、またはどのようにして取得できるかを優先に考え、履修科目の選択をすることが多くみられる。さらに、従来の講義型の授業は、まとまった知識情報を伝達するには便利であるが、聞き手は一定以上の時間に集中し続けることは難しく、すでに持っている知識や技能と統合していく余裕がないため、記憶にも残りにくく応用へ活かせないのが現状である。このような状況から、どのようにすれば学生に学ぶことの楽しさを感じてもらうことが課題であり、現状に合わせる授業形式を再考せざるを得なくなってきた。その試みとしてGSPクラスでアクティブ・ラーニング形式の授業を行うことにした。

II. GSP クラスの中国語の授業に取り組むアクティブ・ラーニングの試み

1. 講義型の授業の問題点

一年次の中国語の授業は発音からスタートし、徐々に文法項目に入って、短いスキットの意味を理解するというステップで進める。しかし、従来の講義型の教え方では以下の問題を抱えている：

- a. 発音練習の長時間のトレーニングがほぼ不可能である。なぜなら、受講者の母語である日本語の音節が少ないため、中国語の発音は非常に難しく感じ、学習する最初の段階から既にネガティブな感情を抱いてしまうからである。
- b. 文法説明は教師が一方向的に説明することで、受講者の理解度の把握がしにくい。一方、受講者は理解できない点があった際も、大人数の前で質問をするのは抵抗を覚えてしまう。
- c. 音読の練習は一斉にする場合、受講者は真似をするだけでその発音が正しいかどうかについて漠然な認識になってしまう。しかしながら一人ずつ指導するならば時間のロスになり、なかなか実行できない。そこで、アクティブ・ラーニング形式で以上の問題点に対し解決策として以下のような実践を試みた。

2. GSP クラスの授業の実施内容

- a. 発音練習はまず一斉に練習した後、グループに分けてお互いに発音チェックをする。この間教師は見回り、適切に指導を行う。
- b. 文法説明は、まずドリル問題を配布しグループに分け、教科書の文法項目の説明を理解しながら、受講者同士で話し合いながら問題を解いてもらう。その間、教師は見回りながらそれぞれの質問に応じる。そして最後にまとめて文法の説明を行う。このようなやり方によって、受講者の不明点または誤解しやすいところも把握できて、効率良く対応できるようになる。
- c. 音読の練習については、先ず教師に難しい発音の確認をする。そしてオーバーラッピング形式で各自自分のペースで練習し、次にペアでスキットの音読をした後、最後にグループ間でスキットの会話内容を音読するという手順で進める。このような方法によって、より現実味が増した中国語の会話を味わえ、語学を学ぶ楽しさが増すことと考えられる。

3. 講義型クラスとの比較

アクティブ・ラーニング形式のやり方と従来の講義型の授業とはどう違うのか、また、それぞれどのような学習成果をもたらすのかについて、本学のレギュラーの1クラスと比較する形で検証してみる。(中国語を履修するレギュラークラスは複数あるが、学力の均等を考慮して比較対象となるクラスは商学部の成績上位の学生で編成したクラスとする。)

3-1. 授業の進め方

アクティブ・ラーニングの授業の目的は、学習者の自立した学習力を育てることであるため、「教師の役割も知識を分かりやすく教える存在から、学習者の自立を支援するファシリテーターとしての存在に変化しなければなりません。」⁴⁾したがって、従来通りの講義型の授業と比べ、教師の居場所も変わり(図1)、各グループを見回り、受講者の活動状況を確認しながら、質問など

の対応をする。最後に授業の内容を総まとめ、解説を行う。教科書の進度により進め方が若干違うが、典型的な例としては表1の通りである。

表1. 講義型とアクティブ・ラーニング型の進め方の比較（一回の授業例）

タイプ別	(受講者数 26 名)	グループ学習型 (受講者数 16 名)
授業の流れ	1、教師から文法の説明を行う。 2、各自ドリルで理解状況を確認する。 3、一斉音読を行う。 4、単語小テストをする。	1、グループで文法の理解について話し合う。後に教師がまとめて説明をする。 2、ドリルの問題を話し合いながら解く。 3、一斉音読の後にグループ単位で会話をする。 4、単語テストは壁式ホワイトボードでチーム対抗戦。

(筆者作成)

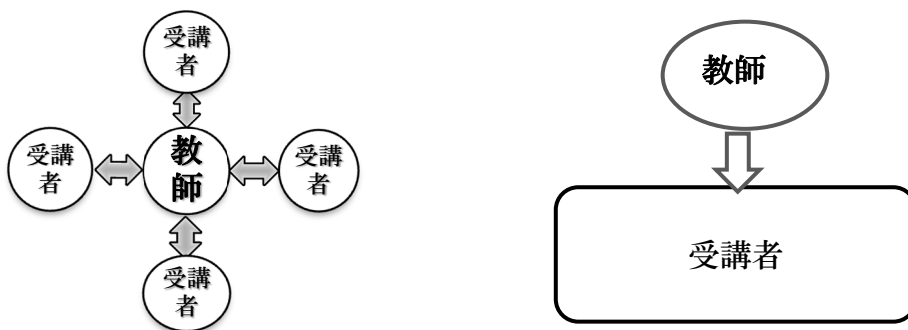


図1. アクティブ・ラーニングの授業及び講義型の授業における教員の位置づけ（筆者作成）

3-2. 試験の結果

a. 中間試験

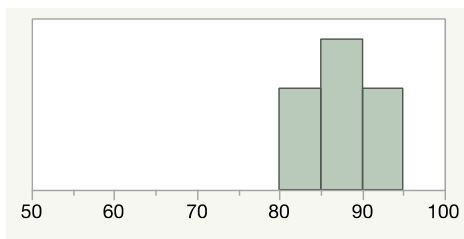


図2. GSP クラススコア（筆者作成）

要約統計量 (GSP)

平均	87.214286
標準偏差	4.0983781
平均の標準誤差	1.0953376
平均の上側 95%	89.580619
平均の下側 95%	84.847953
N	14

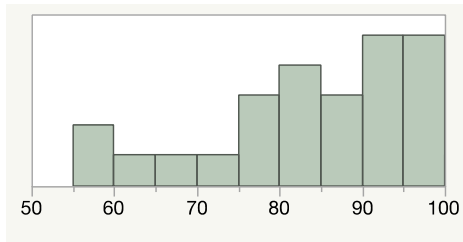


図 3. レギュラークラススコア (筆者作成)

要約統計量 (レギュラー)

平均	84.192308
標準偏差	12.664973
平均の標準誤差	2.4838055
平均の上側 95%	89.307801
平均の下側 95%	79.076814
N	26

b. 期末試験

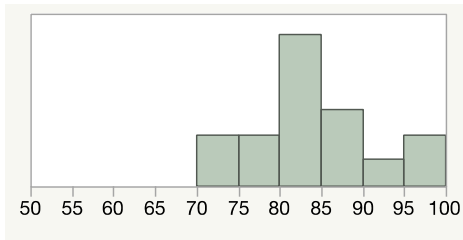


図 4. GSP クラススコア (筆者作成)

要約統計量 (GSP)

平均	83
標準偏差	7.0804896
平均の標準誤差	1.7701224
平均の上側 95%	86.772927
平均の下側 95%	79.227073
N	16

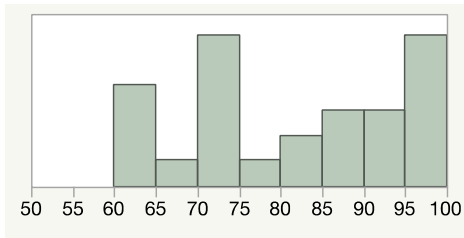


図 5. レギュラークラススコア (筆者作成)

要約統計量 (レギュラー)

平均	80.076923
標準偏差	13.687726
平均の標準誤差	2.6843839
平均の上側 95%	85.605515
平均の下側 95%	74.548331
N	26

3-3. 考察

今回、GSP クラスで行ったアクティブ・ラーニング形式の授業の学習成果を検証するため、講義型の授業で受けたレギュラークラスの中間試験及び期末試験の成績状況を比較した。

その理由として：

- 使用するテキストは同様である。
- 学習進行度がほぼ一致する。
- 試験内容の難易度が同レベルである。

まず、中間試験の結果を見てみよう。要約統計量の平均値は GSP クラスの方がやや高い。しか

し、二クラスの成績分布を示すグラフを確認すると、レギュラークラスの方が高得点の受講者数が多いことが分かる。更に、期末試験の結果を示す図4と図5の平均値もGSPクラスがやや高く、高得点の受講者数を見るとGSPクラスの方が劣っていることが分かる。一方、中間試験及び期末試験の成績分布から見て、もう一つ言えるのはGSPクラスの80点以上が圧倒的に多く、レギュラークラスの成績の差は大きく開いている。この結果から、GSPクラスでグループ学習を行う回数が多いことによって、受講者は授業の内容に対する理解を全員が共に進めることができ、個人差がさほど無くなると考えられる。しかしレギュラークラスでは受講者一人一人が各々で行う学習になり、優れている成績もあれば、合格点にも達せないものもあるという結果になるのである。

4. 現行のアクティブ・ラーニングの問題点

講義型の授業の問題点を改善するためにアクティブ・ラーニングを試みたが、まだ試行錯誤の進行中であり、問題点についての改善も必要である。

a. 時間配分について

講義型の授業に比べて、アクティブ・ラーニング形式の授業は時間の配分に苦勞するという点がある。というのは、講師が説明するだけならば短時間で済ませられるが、受講者同士で話し合いながら理解していくには倍以上の時間が使われてしまうのである。どうしても文法の理解に時間を多く使ってしまい、音読やリスニングのトレーニングをする時間が短縮してしまう問題点がある。

b. 評価の基準

アクティブ・ラーニング形式の授業を受講する学生に対して、どう評価するかは検討する余地がある。今回のGSPクラスの受講者に対して、従来の講義型の評価基準と同様にしたが、アンフェアのところがあると言わざるを得ない。グループ学習における各セッションにどのような姿勢で臨んでいるかなどの要素も評価に入れるのも、今後改善の一つだと考えている。

c. 学習成果

教育現場でアクティブ・ラーニングを取り組んで講義をすることによって、どのような成果がもたらされるかの検証は決して単純なことではない。本稿では試験の結果で検証してみたが、それ以外の成果は反映されていない。例えば、グループ学習によって、学習意欲を高めることは明らかになったが、データの取捨は難しいと感じた。

Ⅲ. 語学の授業におけるアクティブ・ラーニングの課題

1. 語学の授業におけるアクティブ・ラーニング

アクティブ・ラーニングは漠然としてすべての科目に適しているように思われるが、科目の特性により具体的なやり方として、それぞれの授業についてのデザインは異なると考えている。語

学学習は基本として「読む、書く、話す、聞く」の4技能を伸ばしていく教育であるため、90分の授業ではアクティブな姿勢で取り組むときもあれば、受動的、静的に受講するときもある。定められた知識情報量をいかに効率的に受講者に伝達できるかは、講師の周密な授業設計が必要になってくる。

山地（2014）⁵⁾ は日本の大学教育の授業改善について、アメリカの「7つの原則」と呼ばれる授業改善の指針を挙げ、アクティブ・ラーニングに当たる「2. 学生間の協働」、「3. 能動的学習」を補完する形として「1. 教員と学生のコンタクト」、「4. 迅速なフィードバック」及び「5. 学習時間の確保」もあつてのアクティブ・ラーニングの実質化をするキーワードだと指摘されている。能動的な学習を実現するには、科目の特性に合わせ補完する形の工夫も大切だと考えている。

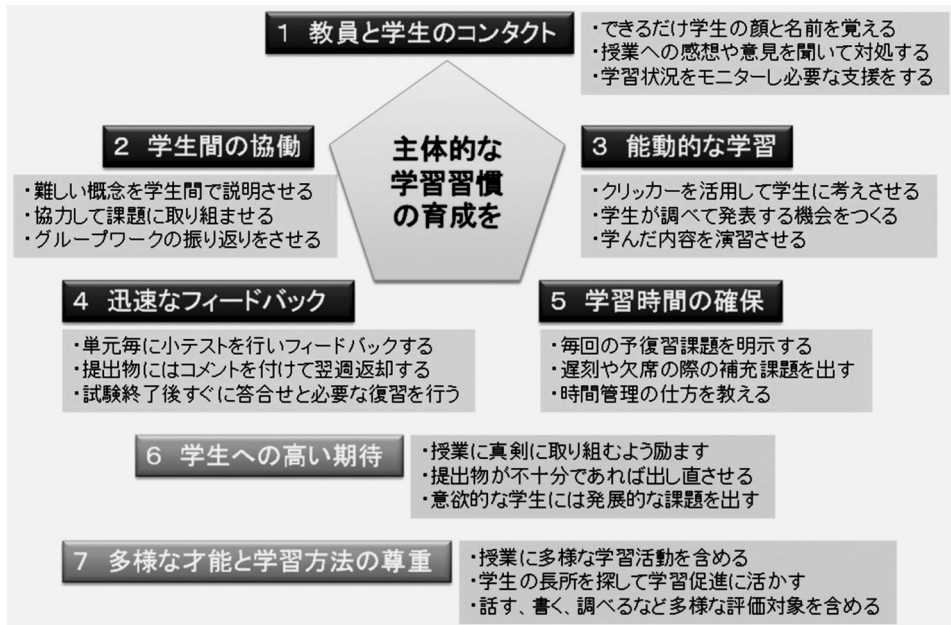


図 6. 「7つの原則」とそれぞれの工夫例（山地 2014 より引用）

2. 今後のアクティブ・ラーニングの取り入れの課題

1) 反転授業を導入する必要性

前述のように講義型の授業であれば、一つの文法を説明するとき10分で終わることに対して、グループで話し合いながらドリル問題を解いていくには倍以上の時間が必要になってくる。90分の授業という限られた時間内でアクティブ・ラーニングを取り入れながら一定の知識の伝達量を確保するには極めて困難である。そこで必要になってくるのは、反転授業との組み合わせの形で語学学習を進めていくことである。つまり授業での活動の一部を自宅で行い、行ってきたことを

教室でグループ学習を通して完成するということである。

2) インターネットを利用する様々なメディアの活用

語学の授業で実行するアクティブ・ラーニングとして、欠かせないのはインターネットを利用して様々なメディアを活用することである。例えば、本学の Moodle を利用するのに大きなメリットがある。反転授業を取り入れる場合は、学生に自宅で行ってもらい課題や小テスト問題を Moodle にアップして、いつでもどこでも学ぶことができ、受講者にとって大いに便利である。

さらに、受講者の能動的な学習の慣習化に伴って、グループで iPad のアプリを活用して、様々なチャレンジができ、より楽しい語学の学習活動を期待できるのではないかと予想される。

おわりに

アクティブ・ラーニングが今、改めて注目されるのは、世界的な大学教育改革の流れの中で「学習者中心の教育」の模索が本格化してきたこととも呼応する。そして「学習者中心の教育」、すなわち「教員が何を教えたか」ではなく「学生が何をできるようになったのか」を基準として教育を考える場合、講義形式の授業だけではなく、学生が能動的に授業に参加する授業形態が今まで以上に求められるようになったのである⁶⁾。

無論、学習者の主体的に学習習慣を育成することが重要視され、教師はどのように知識を伝達するということからどのように学習者を誘導し、できる限り学習者自身にその知識を身に着けさせることへのシフトが必要になってきている。

参考文献

- 1) http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_
- 2) 溝上慎一 アクティブ・ラーニング導入の実践的課題 『名古屋高等教育研究』第7号 2007.
- 3) 森澤 正之「反転授業を導入した授業改革の取り組み」JUCE Journal 2015 No.1.
- 4) 山本崇雄 『はじめてのアクティブ・ラーニング! 英語授業』 学陽書房 2015.12.
- 5) 小川 勤 『アクティブ・ラーニングと学習成果に関する研究－「山口と世界」を通して得られた知見と課題－』大学教育 2014.No.11.
- 6) 山地弘起 「アクティブ・ラーニングの実質化に向けて」JUCE Journal 2014 No.1.